



第6回

夢、アイデア、そして志

平成24(2012)年1月

「国家の品格」の著者、数学者の藤原 正彦先生は本の中で、“偉大な数学者を多く輩出する土地があるので、なぜなのかを探ってみると、そこには「美の存在」「跪く心」「精神性を尊ぶ風土（金銭や世俗的なことを低く見る）」の三つの要素が共通しているようだ”と述べておられる。


夢アイデアプロジェクトと直結する話ではないが、先生の指摘でふと思いついたことがある。それは、“志”というはどのような契機や条件があれば育まれるのだろうか、ということである。

志といっても様々で、貧乏な人が金持ちになろうと努力するのも、病弱な人が健康になろうと精進するのも、どぶに落ちた人が這いあがろうとするのも志である。千差万別の志の中で、特に考えてみたい“志”というのは、自らを捨てて国家に殉じる覚悟、たとえば西郷隆盛や吉田松陰のような人物の場合である。何が共通する要素かを考えているうちに、山路愛山（1865年－1917年）の詩に出会った。

“日本人は、古より美しき自然に育てられて、美しくやさしき詩人たるべく養われたりき”

風土が人を、風土に似せて創るというのである。そう考えた時、大人物は、幼少のころ“美しいふる里”に恵まれているのでは？ と思えてきた。この場合、厳しさも温かさも、ウサギを追い、小鮒を釣って遊び呆ける楽しさも、「美しい」風土に含まれているとしよう。西郷隆盛の薩摩は、錦江湾の海と桜島山、それに厳しい郷中教育が、吉田松陰の萩にも笠山の海や椿の群生地、美しい街並みや熱い師弟教育があった。そのようなふる里に育てば長じた後、ふる里をこよなく愛せずにはおられないだろうし、その愛はかならず祖国愛へと通じているだろう。愛するものが危急存亡の機に遭遇するとき、救おうとする志が生まれるのは必然で、それがために殉じることは苦にならない。今日の諸々を鑑みるまでもなく“美しいふる里づくり”は喫緊にして永遠の課題である。

ところで、物質界では“無”の存在にすぎない夢やアイデアが、“有”への運動を始めるには“志”がなければならぬ。ここ2、3年来“実現化”が夢アイデアプロジェクトの大きな課題なのだが、実現してほしい案件に限れば、提案者がその志を秘めているかどうか、あるいは志が結集しやすいか、という視点も欠かせない。近年では、



交流会での発表を、実現への一里塚として捉える提案者もおられるように推察される。かかる案件には温かい支援の輪が広がるよう願わずにはおられない。

その一方で、実現にはほど遠くても“九州を丸ごとデッサン”するような壮大な夢、真夏、湧きあがる入道雲のようなおおらかな夢も、今日ほど切望される時代はない。応募者諸氏よ、新年こそ心に太陽を描いて奮起しましょう！

針貝 武紀

初代夢アイデア企画委員長 現・特別顧問

